

劇団いちびり一家 いちみり☆しあたあ5

怪談／隣の家

阪上洋光

1 世界は不思議に満ちている？

唐突に登場したのは、三人のパジャマ姿の女たち。
裸足である

パジャマたち

パジャマ1

パジャマ2

そこにはだれもいませんでした。

だれもない場所に、わたしが立っているのです。

そこは空地に見えました。なにもない場所に見えました。

遠くで踏切の警報音が鳴っている。

パジャマ1

パジャマ2

パジャマ3

なにもないのが見えた——。はて？

だれもないのにわたしがいる——。はて？

なにもないのに何をを見たのか？ だれもないけれどいたのは誰か？

パジャマたち

不思議、不思議。世界は不思議に満ちている。

パジャマ1

未来を思うことは、過去を思い出そうとすることに似ている。

パジャマ3

わたしがここにいることは、ここにあなたがいないことの証明になる？

パジャマ2

わたしがわたしであることをわたしはどうすれば実感できるの？

パジャマ1

わたしはここにいる。

パジャマ2

いいえ。

パジャマ3

わたしが見ているあなたが立っているのです。

パジャマ1

いいえ。

パジャマ2

ここにいるのはわたしです。わたしがあなたを見えています。

パジャマ3

いいえ。

パジャマ1

いいえ。そこにはだれもいませんでした。

パジャマ2

いいえ。そこにはだれもいませんでした。

パジャマ3

いいえ。そこにはだれもいませんでした。

踏切の警報音はやがて消える。

パジャマたち

(少し考えて)そうです。そこにはわたしが立っていたのです。

パジャマ3

いいえ。待っていたのです。カーン、カーン、カーン、カーン。

パジャマたち

カーン、カーン、カーン、カーン

——これは警報音の真似だった。

パジャマ1

予感。なにかが始まりそうな予感。

パジャマ2
パジャマ3

瞬間。なにかが終わるその瞬間。
未完。 未完成。 終われなかった、終わらなかった。 未完、 未完。

間。

パジャマ2
パジャマ1
パジャマ2
パジャマ3
パジャマ1
パジャマ3

なにも起きない、なにも始まらない。 退屈したらどうしよう？
わたしが死ねば、わたしは完成するのでしょうか？
（パジャマ1に）あんた、パジャマだよ。 もう寝るの？
（パジャマ2に）あんた、パジャマだね。 まだ起きないの？
わたしが死ねば、世界が完成するのでしょうか？
世界はすべて未完のまま、それでよしと……。 できる？。

風が吹き抜ける――。

パジャマ1
パジャマ2
パジャマ3

風が吹いています。
思い出が暴走しました。
過去は未来に変形します。

パトカーと救急車のサイレンが聞こえる。

パジャマたち
パジャマ3
パジャマ1

わたしたちはなにを目撃したんでしょうか？ いいえ！
なにも始まらない。 なんにも終わることはない。
いくなれば、あるけどないのね。 ないがある。

パジャマ2

それをいうなら、ないけどあるの。あるがない。

風が吹き抜ける——。サイレンは聞こえない。

パジャマ1

風が吹いています。

パジャマ2

思い出が暴走しました。

パジャマ3

過去は未来に変形します。なんにもないということは、なんでもあるってことでしょうか？

パジャマたち

(少し考えて)いいえ！ 不思議、不思議。世界は不思議に満ちている。

パジャマ1

わたしがここにいるってことは、わたしはほかにはいないってこと。

パジャマ2

わたしがここにいるってことは、わたしはここにしかないってこと。

パジャマ3

わたしがここにいるってことは、わたしはもう……、

パジャマの女たち、耳を塞ぐ。

音楽が聞こえる。

それは弘田三枝子の『人形の家』だった。

雨が振っている。すべての音が雨に溶ける。
そこにはだれもいない——。

2 雨

傘を差した女1が登場する。

女1は立ち止まり、振り返り、少し歩いて、
また立ち止まった。

女1

だれもない？ 犬は飼えないって叱られて、それでも諦めきれず、無
言で泣いて、泣くに任せて、泣いて、泣いて……。まだ子どもだったか
ら。家のことや夫婦のことなんて、ピンとこないって、お母さんは動物
が嫌いなんだって思った。お母さんは、わたしのことも嫌いなんだっ
て。お父さんは優しくかったもんね。親切だった。親切ってのも変か
……。テンションあがったなあ、正直。離婚するって聞いた時は。我が
身に降り掛かる不幸がドラマチックに思えて。——そうか、ここだ。こ
こにあの犬、捨てたんだ、わたし。あの子を置いて、ここに。逃げたん
だった、わたし。走ったんだって、家まで。名前なんだっけ？ 付けた
んだけどなあ、確か、名前。あの日も今日と同じように雨が降ってた？

いつの間にか女2と女3も登場していた。

女2

女1

女2

ワン、ワン（と犬の鳴き声）
え？

ワン、ワン。

女
3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 2 3 1 3 2 3 2 3

お手

(女3にお手をする)

お座り、

(お座りをする)

ビョーキなんです、この子。

あ、え？

ええ。

ワン！

もう長いんです。

長い？

ずーっとこうなんです。長いんです。

あれ？ わたし、ここは？

この子、犬に見えますか？

いいえ。

いじめてるみたいでしょ？ 酷い虐待をしているみたい？

そんな、

雨降ってました？

はい？

傘。

あれ？ 気づかなかった。

え？

ん？

傘を差していることに気付かなかった？

女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1

はい？

だって、いま。

いえ、あの（と傘を仕舞う）

あなた、ご自分が傘を差していることに気づいてなかったのね。

ああ、いえ。そうじゃなくて。上がったんですね。それ、気付かなくつて、わたし。

ビョーキなんですね。

いえ、わたしは、

雨は降りませんでした。今週は一度も降っていません。

電車の窓に滴が、つい五分前まではいいお天気で、わたし窓から外の景色を眺めてました。思い出していました。そしたら、あつという間に雲が、外は夜みたいになって、一気にザーッと。

やっぱりこの子、犬には見えないでしょ？ ビョーキなんですね。

え？ そっち？ あの、わたし見えました、雨が降る前から雨が降り始める瞬間まで、この目で。

外見さえ犬だったら、お利口な犬なんです。そうでしょ？ 外見が犬じゃないから、ダメなんです。この子、ビョーキなんですね、やっぱり。

お子さんですか？ お医者さま？ 介護士さんですか？

拾ったんです、雨の日に。

え？

捨てられたんです、この子。ここに。

まさか。かつがないで。

わたし、この子を捨てた飼い主を捜しています。

女 3
女 1

いつから？
もう長いんです。犯人は現場に戻ると聞きました、テレビドラマ、刑事
もの。現場ヒヤッペンというそうです。

女2が女1の足元にまわりつく。

女 3

不思議なこともあるもんですね。

女 1

あの、ここって？ この空地、以前はなにがあったんですか？
空地？

女 3

勘違いでした。わたし、ここ、もしかしたらって。そんなはずはない。

女 1

ごめんんさいね、すっかり甘えて、

女 3

名前、なんていうんですか？

女 1

知りません。

女 3

え？

女 1

この子、わたし以外には懐かないんです。あなた、逃げてきた？
はい？

女 3

降らない雨に打たれ、見えない雨をよけて、ここへ。

女 1

もしかしたらって、懐かしいような気がして。でも勘違いでした。

女 3

差し上げましょうか？ よかったら？

女 1

この子をですか？

女 2

ワン、ワン。

女 3

勝手口のカギを掛けたか心配だって、そういうんです。

女 1

いま？ そう言ったんですか、いま。

女 3

女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1 女 3 女 1

もう随分前です。とにかく、そしたら、なんだか。ほら、やっぱり。あのじゃないですか、よくあることでしょ？ そしたら、パパが「戻ろうか」って。その日は珍しく家族で映画を観ようってなことでした。「映画はじまっちゃうものね」って。そのまま、駅までまた歩いたんです。楽しく過ごせるはずのお出掛けが、なんだか急に窮屈になってしまつて。わかるでしょ？ よくあるじゃありませんか、そういうこと。ウチが特別変わっていたとは思えません。どこにでもある、さりげない家族でした。駅に着くとアナウンス。どうやら人身事故で。パパったら、ずっと舌打ちのしっぱなし。わたし、大っきらいなのね、それ。ママもすっぱりイライラし出して。ホームにいる人、みんなでイライラ。不謹慎でしょうか？ 不謹慎ですネ、やっぱり。わたしが飛び込みたかった。そんなことまで考えちゃって。まだ、子どもでしたから。

あの、

え？ あら？

はい？

あなた、ホームにいた？

知りませんよ。

でも、さっき。

え？

電車の窓から見てたって、

雨の始まりですか？ 見ましたよ。あ、だから、そのあとホームにもいきましたね。そういうことなら。いえ、そうじゃなくて。あれ？ なんだか疑われてます、わたし？ どうして？ あなたに嘘を吐く必要性がな

女 3

女 1

女 3

女 1

女 3

女 1

女 3

女 1

女 3

女 1

いでしょ？ あるの？ ないわよ。

わたしは始めっから、そんな気はしてました。予感があった。勘がいい方なんです。でね、

なんですか？

だからね、

なんなんですか？

ごめんなさい。似てるのよ、どこか、

だれに？ ですか、

駅のアナウンスが繰り返し「お急ぎのお客様にはご迷惑をおかけしま

す」って。パパはますます不機嫌になって。ママは結局、電車を待た

ず、家の様子を。勝手口が気になるからって。先に行ってって。わた

し、妹の手を強く握りました。嫌な予感があったのね。握り返すだろうと

いう予測は外れ、妹はわたしの手を払い、ママにしがみつきました。一

瞬、何が起きたのかわからなくなるくらい。大泣きしたんです。妹で

す。ママは何度も先に映画館へ行くように妹に言っていましたが、根負け

し、妹を抱き上げて、走ってホームの階段を降りていきました。ママに

抱かれる妹を見るの、いつ振りだろうなんて思いました。驚きました。

ママに抱かれた妹は黙ってじっとこっちを見てましたから。あの目、忘

れられない。ねえ、下さらない、それ。わたし傘を持ってないんです。

コンビニのビニール傘ですよ。別に、どうぞ。

善意の傘。

違いますよ、駅の傘じゃありません。買いました、ちゃんと、駅前のコ

ンビニで。

女 3
女 1

そんなつもりじゃ、ごめんなさい。

雨が降っていたので買いました、それ。いま、雨も上がって、必用ないので差し上げます。善意の傘じゃありません。わたしの善意でもありません。通り雨だった、夕立ち。どうぞ使ってください。捨ててください。も構いません、ぜんぜん。わたしにはもう必要ないですから。雨は上がりました。やがて星も見えるでしょう。だから、わたしは逃げてきたきたというより、立ち向かうような。どっちかというと、そっちでした。傘で武装し、雨にくじけず、ここへ。迷い込んだんじゃないんです。ここが、もしやと。勘違いでした。雨は降っていました。広げてみてください。さっきまで雨に打たれていたこの子です。雨の名残が発見できません。大粒の雨でした。一粒ずつ確認できるほどでした。

傘を開くと仰ってるんですか？ わたしに。

お好きにどうぞ。わたしは嘘など吐いてないと言ってるんです。

物々交換。

はい？

わたしは犬を。あなたは傘を。

要りません、どちらも。すべてあなたのものです。（一礼）

それっきり、ママは帰ってきませんでした。妹も、もうどれくらい時間が経ったのか……。パパとわたしは、まだあの日のホームで遅れた電車を待っているんじゃないでしょうか？

知りませんよ、そんなこと。

あの人身事故、飛び込んだのはママだった。そんな気さえするんです。

もうよしてください、興味ありません。

女 3
女 1
女 3
女 1
女 3
女 1
女 3
女 1
女 3

女 3

女 1

女 3

女 2

女 3

女 1

女 3

女 1

女 3

女 1

女 3

お急ぎのお客様にはご迷惑をおかけします、
わたし、カンケーありません！

あなた、ホームにいたのよ。あの日のあのホームに。そうでしょ？
その目、わたしにはわかるのよ。

ワン、ワン。

雨は降りませんでした。あなたは傘で顔を隠して戻ってきた。
狂ってる、

ぼろぼろ、ぼろぼろ、傘の中で泣いたのね。傘に隠れて、ぼろぼろ、ぼ
ろぼろ。大粒の涙を零したんだ。ぼろぼろ、ぼろぼろ。そうでしょ？
巻き込まないで！

飛び込んだママの身体は、通過するはずだった特急の冷たい車体にぶつ
かり、骨は砕かれ、観衆の悲鳴とブレーキ音にママの声はかき消され
る。飛び込んだママの身体からは真っ黒い血が噴き出して、ママの上を
何度も何度も車輪が通過し、巻き込まれ、やがてママの下半身はフード
プロセッサーにかけた鶏肉そっくり。わたしは想像する。ママの右手
は、勝手口のドアノブに引っかかっている。勝手口のカギは掛かっ
ている。ママの右手はようやく安心する、ママの右手はグラリと落下す
る。あなたは電車の窓からここに居るわたしを見つけた。それで、ここへ。
違います。

判ってます、そんなはずはない。ママは出て行った。わたしたちを置き
去りにして、パパは……。それ、知ってたんじゃないかって。そんな気
がします。いまなら。認めたくないんですね、捨てられたなんて。ママ
はあの日、電車に飛び込み死んじゃって、でもそれは自殺とかじゃなく

女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1

てね、映画が見たいけど戸締り用心、気になって、慌てて、落ちて、バラバラに。だったらせめて右手ぐらいいはドアノブに。ママは右利きでしたから。愛してました、わたし。大切な家族でしたから。

妹さんは？ おかしいじゃない。辻褄が合わない。器械体操クラブに通ってましたから。

は？

妹は、三つの時からスポーツセンターで、器械体操を習ってました。なにそれ？

くるり、ひらり、かわしたんだと思います。あの子なら。特急を。

あなたのママは階段を降りて行った。妹さんを抱き抱え。

ええ。

乗りたかった電車は来なかった。ダイヤは乱れ、人身事故で。

ええ。パパはずっと舌打ちをしていました。

人身事故の犠牲者はママじゃないでしょ？ あり得ないでしょ？

ええ。判っています。

わからないけど、ママにも事情があったのね、それで。

妹は元気でしょうか？

家族なんだから、なにかあったら連絡が。なかったのなら、きっとね？

ママには男がいたのかもしれない。わたし、許せないんです。

ママもきつと苦しかったと思う。悩んだと思うのよ。

時間通りに電車さえ来ていけば、ん？

女 3

女 2

女 3

女 2

女 3

女 1

女 3

女 2

女 1

女 3

身勝手な。人身事故で。ダイヤは乱れ。予定は狂い。ママはとち狂っ

て。とばっちりの蒸発でしょ？ 犠牲者は死んだ女ですか？ 飛び込んだ女ですか？ あの日、予定通りだったのはその女だけでしょ？ 死の

うと決めて。死んだのよ、予定通り。ちがう？ 犠牲者はだれ？ どっ

ち？ ママでしょ、パパでしょ。わたしだって犠牲者でしょ？ ちがう？ この場合、妹はどうなるの？ 傍観者でしょ？ どうしてちゃんと見てくれないんです？ ちゃんと見なさい！ これが人間ですか？（と女2を指す）これは犬です。ワンと鳴いたでしょ？

ワン！

ほら、鳴いた。まだ鳴くぞ。

ワン、ワン！

犬だろ、これは。人間がワンと鳴く？ 鳴かないよ。鳴く？ じゃ、鳴いてみて。ほら、鳴けよ。人間が鳴くか、ワン！ 鳴かないよ！

——ワン。あ！ ごめんなさい。

鳴いた？ ワン？

（笑い出す）

え？

人面犬！ 人面犬！ ママあ！ 怖いよお！ 人面犬が出たあ！

女3は逃げていく。

遠くでカミナリガ鳴っている——。

3 風

風が吹いている。上空には黒い雲が集まっているはず。

ビョーキなんです。

え？ あ、はい。伺いました。

そうじゃなくて。

え？

あ、ごめんなさい。わたし、——人面犬です。

(コクリ頷き、後ずさる)

信じるう？ ——姉です、いまの。

いまの……。あなたなの？

はい。

妹さん？

変でしょ？ お姉ちゃん。

はい。あ、ごめんなさい。

ぜんぜん。変なんです、あのひと。正直、困ってます。頑固だから。

長いんですか？

うーん、昔っから、ですね。お住まい、この辺ですか？

いいえ。

ですよ。超有名人。この辺じゃ、お姉ちゃん。司書です。駅前なの？

え？

女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女
1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2

女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女
1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 2 1 2

雨降ったんですね。気付かなかった。

お姉さん、ひとりにして大丈夫なの？

…結婚したい人がいるから、会ってほしいって。それがダメだったのかなあ。あ、お姉ちゃんは心配ないです。すぐだから。

結婚？

全部が嘘ってわけでもなくて。ママが蒸発したって、さっき。

ああ。

まだ小さくて、わたし。実は顔も覚えてないっていうか、写真なんかでは見たことあるんで。でもあんまり。自分の記憶には。

人身事故。

まったく覚えてません。ホントかどうか。パパの舌打ちだって聞いたことないですし。

あれ？

はい？

いや、ごめんなさい。

なんですか？

ううん、いいの、いいの。

人面犬とか信じちゃうタイプですか？

まさか。今日は特別。いつもなら絶対に信じないし、そういの、オカルト？ 都市伝説？ まったく。

お姉ちゃんの才能ですね、じゃあ。

雨の始まりを見ちゃったから。あの雨の中を歩いたから。ドボンと飛び込んだのね、わたしも。

女 2
女 1

ドボンと。

普段とは違う何かが起こる気がして、そんな何かに期待しちゃって。どうにも具合が悪くてね、きょう。職場でもあんまりうまくいってなくてね、ここんどこ。早退して家に帰るつもりだった。吉岡さん、あ、上司ね。嫌な顔されながら、駅に着いたら、あれって。こんな明るい時間にこのホームにいること珍しいなあって。朝の人混みとはまた違う、わたしの知らない駅だった。毎日使ってる駅なのによ。気が付いたら、わたし。反対側のホームに立ってたのね。そのまま、来た電車に――。

カミナリが鳴る――。

女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1
女 2

わかるなあ、ちよっと。

魔が差したっていうの？ こういうの。

それでこんなところに？

こんなところ？

ぐるりフェンスで、入れないでしょ？ 入ろうと思わない、普通は。お

化け屋敷。

お化け屋敷？

心霊スポット？

心霊スポット？

十年、もつとになるかなあ？ お家も残ってましたけどね。入り込んで悪化するヤツもいて、取り壊し。古いお家だったから、しばらく井戸だけが残って。それがまた拍車をかけた。貞子？

女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女
2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1

え？

ほら。流行ったじゃないですか、映画。ホラー映画。

ああ。

犬だか猫だかが落ちて、騒ぎになって。子どもが落ちたら大変なこと
で、近所の人でお金出し合って埋めたんです。うちも幾らか出しました
もん。回覧板回ってきて。

そっか、ご近所なのね。

隣なんです、うち。

お隣？

怖いでしょ？ お陰でお姉ちゃん、一時貞子って呼ばれたみたいです。

貞子。お姉さん？

怖いでしょ？

わたし、貞子。

え？ 名前？

そう。

マジ？

マジ。

ウケる。あ、ごめんなさい。

緒方貞子、沢村貞子。立派な方も多いんだけどね。

ちよっとわかんない。すみません。貞子だろうが伽椰子だろうが、やっ
ぱり姉は姉なんですよね。当たり前か？ 想像力が逞しい姉だけど、多
少暴走気味の姉だけど。それが姉の真実なら、一方的に否定はできない
なって。ママが蒸発してね、たぶんすごく大変だったと思うんだけど、

女 2
女 1

わたし、それ実感なくて。実感ない分、お姉ちゃんがフオローしてくれてたのかなあ、とか？ パパは無口だから、なに考えてんのかさっぱりなんですけど。やっぱり。みんなに祝福されて結婚したいなあって。母親を知らずに育ったせいとか、自分は母親になれるのかなあとか心配だったり。家族とか維持できるのかなあ、とか？

赤ちゃん？
いません、いません。欲しいけど。年だけど、それを切り札にしたいか、意地っていうか、焦りもありますけどね。実際のところ。貞子さんは？ 家族は？
旦那もいた。子どももいた。父も母もいた。

女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1

いろいろあって、ここへ。
魔が差したんだね、やっぱり。
時間が解決するなんて、嘘ですね。こじれて、もつれて。
お母さんのこと、恨んでる？

恨んでる。そう思ってた頃もあったけど。難しいです、実際。知らないひとなんです。会ったこともない人を恨めないじゃないですか？ せめて恨んで、親子のケンケイだけでも維持しておきたかったけど。それも。特殊なウチだって思っていました。昔は。でも、この年になれば、ね？ 特殊じゃないウチなんて無い訳でしょ？ どのウチも変わって。それなりに、こじれて、もつれて。結局、ウチもフツーです。

女 2
女 1

お姉さんは個性的なだけ。
嫌いなものって飲み込みにくいでしょ？ 噛んで、千切って、すり潰しても、どうしても。のどの奥へは入ってくれない。咀嚼？ お姉ちゃん

女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女
2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2

はずっと咀嚼してるんじゃないかなあ。わかんないけど、わたしたちを。わたしたち家族を。飲み込みたいんだと思うけど。のどの奥へは入ってくれない。もう味もなにもないと思うけど。吐き出しちゃえばいいのに。え？

一度。ちゃんと、診てもらったら？ お姉さん。

余計なお世話ですよ、それ。

相互依存。

はい？

結婚するんですよ？ お相手も巻き込んだじゃうわけ？ そこに。

すべて話しています。理解してくれています。

理解？

なんですか？

ああ、べつに。

言ってください。

なんでもない、です。

言ってください！

いえ、そういうつもりじゃ。

じゃ、どういうつもりで？

なんとなく簡単なんだなあって。

簡単？

いや、だから。理解。

理解？

女 1
女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1

そうよ。理解。簡単に理解し合えるんだなあって。
なに、それ？
いいことよね？ 大切。
どういう意味ですか？
だから、べつに、そういうアレじゃないから。
謝ってください。
どうして？ そういうアレじゃ、ほんと。——あれ？

と空を仰ぐ。雨の音——。

女 1

雨——。

雨の音は次第に踏切の警報音へと変形する。

女 1
女 2
女 1
女 2
女 1
女 2
女 1
女 2

撤回してください。
無理よ。雨は降ってる。
風に運ばれて踏切の音。——雨は降ってません。
——そうか、ここだ。ここにあの犬、捨てたんだ、わたし。
あなた、なにも知らないじゃないですか。わたしたち家族がどうやって生きてきたか。普通の家族を精一杯演じて、普通の家族に紛れたいじゃないですか。
やっぱり雨降ってる。ほら、ね？ 見えない？ 聞こえない？
見えない！ 聞こえない！ ここにあるのはない音です。見えない雨、

降らない雨です。ここにはない、ここからは遠い踏切の音が風に紛れて聞こえるばかりです。わたしたちはそうやって生きてきた。ないものがあるように、あるものをないように。なのに、あなた。——なにも知らないくせに！

列車の通過する音だけが聞こえる。

女1 そんなにこだわらなくていいんじゃない？ もう。
女2 わたし、こだわってません。いいえ、あなたです。あなたがこだわってるんです。——なんですか？ なんで笑ってるの？

思い出したの。だから、全部忘れるわ。きれいさっぱり。わかんない。

女1 ここには家があった。家には家族が住んでいた。おはよう、おかえり、いただきます。夏には夏の日差しを浴びて、秋には秋の雨に打たれて。そうね、たまには家族でお出掛けもする。映画ね——。それでいい。冬には冬の風の中に、春には春の風の中に。家族はさりげなく暮らしていたのね。それでいい。お姉さんはまた戻ってくる？ もう一度お会いしたいんだけど。
女2 そんなの幻想なんだ、そんな家族はどこにもいない。

カミナリが鳴り、雨の音がする。

女1 世界は不思議に満ちているのね。そっか。雨の始まりを見た時から。も

う始まってんだ。いや、終わってたのか？ 予感的中。今日はなんだか特別な何かが起こきそう。そうか、そうなのか……。ねえ、オバケ。オバケ見たことある？

はい？

オバケ見たことある？

ありません！ 馬鹿馬鹿しい。オバケなんていません。いるよ。いないけどいるのね、わたし。オバケ。

わたしもオバケだ。そうなのかも。わたしもあなたもオバケなのかもしれない。わたしだけじゃない。世界中がオバケ、オバケ、オバケ。わたしの家族なんてみんなオバケみたいなもんなん。いるようにいって、どこにもいない。でもないわけじゃない。慢性的なダルさのように付き纏い、離れない。もう疲れた。家族、それ自体がビョーキなんだ。みんなビョーキだ！ おい、貞子、養命酒買ってこい。乾杯しよう——。わたしは実感したいの。自分がここにいて。ここで生きてるって。そのやり方さえ判ればなあ。お姉ちゃんの言う通りかもしれない。わたしたちはママに捨てられた、ワンワン。捨て犬なんだ、ワンワン。わたしたち家族はあの日のホームで来ない電車をただ待っている。来る日も来る日もただイライラして、慢性的なダルさをこらえ。死ぬこともできず。他人ばかりが線路に飛び込んで、——あれ？ 雨？ ——降ってない。降ってます。雨は降ってる。そして、わたしはここにいます。わたしだって、幸せになってもいいでしょ？ うらめしやあ。

女 2
女 1
女 2
女 1
女 2

女 1
女 2
女 1

カミナリが鳴る。鳴り続ける――。

女2 ビョーキなんじゃないですか、あなた。

女1 いいえ。

女2 ご愁傷さま。(立ち去ろうとする)

女1 結婚おめでとう。

女2 やめて。

女1 まだどこにもない家族を作るのね。新しい家族。ガンバレ！

女2 どういう意味ですか？ 結局、バカにしてるんですね。

女1 いいえ。

女2 わたし、やっぱりこだわります。撤回してください。

女1 わからない？ わたしよ。あなたのママ。

女2 撤回してください！

カミナリが大きく轟く――。

女2は女1に襲い掛かり、やがて取っ組み合いになる。

雷雨の中にあの歌声、弘田三枝子の「人形の家」だ。

女1は殺害される。――女3がそれを目撃する。

女2と女3は共謀し、女3をどこかへ運ぼうとする。

その刹那、二人の顔にライトが当たる。

女2
・女3

パパ……。

女 女 女 女 女 女
2 3 2 3 2 3

眠れないの？
寝てた。
雨。降ってないよ。
降ってたの。
いつ？
むかし。

4 井戸

眩暈のような暗闇——。
その中に弘田三枝子の歌う「人形の家」だけがこびりつ
いている。
ドボンという音——。
恐らく死体が井戸に投げ込まれたイメージだろう。
死体は井戸の底に沈んでいく。
どこまでもどこまでも沈んでいく……。

パジャマ姿の女2が傘を差して立っている。
雨は降っていない。
そこへお揃いのパジャマを着た女3が登場する。

女 3

むかしって。

女 3 は女 2 から傘を取り上げる。

女 3

似合ってる。着てくれたのね。

女 2

わたし、自分が信用できない。信じられない。

女 3

だれだってそうよ。

女 2

あした、仕事ないの？

女 3

あるよ、普通に。平日だもん。

女 2

お姉ちゃんは普通に働いてきたんだね、ずっと。

女 3

だれだってそうよ。あんた、仕事辞めたの？

女 2

もうすぐ辞める。

女 3

女は家に居ろって？

女 2

わたしがぞうしたいから。生活のこと考えたら共働きがいいけど、わた

女 3

しがそうしたいから。

女 2

理解のある旦那様か。

女 3

理解。

女 2

帰ってきたら？

女 3

帰ってきてるじゃない。

女 2

そうじゃなくてさ。結婚するまで、しばらくこっちで暮らしたら？ 家

女 3

賃だっというらないんだし。生活費だっ。気にしなくていいから。

女 2

パパがそう言ってるの？

女 3

パパは何にも言わないわよ。昔みたいに家族で暮らして、この家から送

女 2
女 3

り出したいのね。

それで決着がつく？

あんた、まだここにいて？　なんか羽織るもの取ってこようか？

女 3は来た道に戻ろうとする。

女 2

わたし、思い出したの。——全部。

女 3

(立ち止まるが振り返らない)

女 2

結婚式。ママにも出席して欲しい。

女 3

どうやって？　あの人はわたしたちを捨てたの。連絡の取りようもない。

女 2

隠し事のない家庭を作ろうねって。なんでも話し合える家族になろうね

女 3

って、——わたしたち。

女 2

幸せにならなきゃね。

女 3

無理よ！

女 2

(振り返り) どうして！

女 3

全部思い出したんだって！　どうして忘れてたんだろう？　どうして忘

女 2

れることができたんだろう？　どうして、わたし——。

女 3

忘れなさい、もう一度。

女 2

わたし、ママを殺して井戸に。お姉ちゃん！

女 3

かわいそうに。怖い夢を見たんだ。

女 2

夢？

女 3

失踪宣言。

女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3
女 2
女 3

失踪宣言？

家庭裁判所。受理されたの。

お姉ちゃん、

あの人は法律上でもちゃんと死んだことになってる。

ちゃんと？

きちんとした手続きを踏んでるの。さんざん警察にも探してもらった。でも、

見つからなかった。失踪して七年が経過すれば死亡とみなされる。

お姉ちゃん、

さ、帰ろう。あんたも大人なんだから、怖い夢みたくらいで、そんな、

井戸。

井戸？

どこだった、井戸？ あったでしょ、ここに。井戸。

井戸？

あつたじゃない。

わたしは知らない。

わたし、思い出したの！

井戸？ どこに？

埋めちゃったけど。ここに古い井戸が。

リングでしょ、それ。あんたお姉ちゃんをからかっているの？

井戸の中でママ、ずっと雨に打たれてる。

パジャマ姿の女1が登場するが二人は気が付かない。

女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女 女
1 3 1 2 3 2 1 2 3 2 3 1 3 2 3 2 3 2 3

そんな井戸はどこにもない。

ママはずっと探してる。心細くて、淋しくて、帰る家を探してる。

一度洗ってからにすれば良かったね。おろしたてのパジャマで寝ると怖い夢を見るから。

ママはどこにいるの？

わたしたちの知らないところ。

本当はどこかで生きてる？

捨てられたのよ、わたしたち。

ちがう！

え？

なに？

声が、

夢よ、それは。

え？

ワタシハココニイル、

お姉ちゃん！

あんた、なににこだわってるの？ 大丈夫？

お姉ちゃん、お願い。本当のこと言って！

ワタシハコロサレタ、ワタシハコロサレタ……、

あんた気丈に振る舞ってたけど、堪えてたんだね。相当。

ウソツキ、

女1は傘を奪う。

女3
ごめんね、気付いてやれなくて。あんたまだ小さかったもんね。淋しかったのね、ずっと。

女2
わたしはママを殺してない？

女1
(女3を指差し)ワタシハコロサレタ、ワタシハコロサレタ、

女3
あれだね、マリッジブルー。みんな、なるってよ。

女2
お姉ちゃん。祝福してくれる？

女3
当然。

女2
わたし、

女3
幸せにならなきゃ。さ、帰ろう。お家に。

女2
うん。

姉妹は女1の方を見ている。

女3
大丈夫？

女2
——うん。

女3
身体冷えちゃった。あんた、走ってお風呂沸かしてきてよ。

女2
わかった。

女3
ほら、走れ！

女2
お姉ちゃん、——ありがとう。

女2は走って退場する。

カミナリが鳴る。

女3は空を見上げる。

女1が傘を差す。――雨の音。

また雨だ――。

女1 女3
――そうか、ここだ。ここにあの犬、捨てたんだ、わたし。あの子を置いて、ここに。逃げたんだ、わたし。走ったんだ、家まで。名前なんだっけ？ 付けたんだけどなあ、確か、名前。あの日も今日と同じように雨が降ってた？

女3は女1から傘を取り上げる。

カミナリが鳴る。雨の音強くなる。

女3
そこにはだれもいませんでした。

女2が戻ってくる。

女1 女2
だれもない場所に、わたしが立っているのです。

女2
そこは空地に見えました。なにもない場所に見えました。

雨の音は踏切の警報音に変わる。

女1
未来を思うことは、過去を思い出そうとすることに似ている。

女3
わたしがここにいることは、ここにあなたがいないことの証明になる？
女2
わたしがわたしであることをわたしはどうすれば実感できるの？

列車が通過する。

女1
わたしはここにいる。
女2・女3
いいえ。

女たち、静かに笑う。

音楽が聞こえる。小坂明子の名曲『あなた』だった。

女たち
そこにはだれもいませんでした。

女たちが歌う。

2016・8・30
おしまい